

2003年1月8日

切なさと癒やしの物語

亡くなった家族や恋人が、当時の姿のままよみがえる。そんな奇跡を描いた作品「黄泉がえり」は、ホラー映画などではなく、切なさと癒やしを伴ったラブストーリーである。

九州の阿蘇山のおもとの町で、五十年以上も前に行方不明となった少年が、年老いた母の元へ、当時の姿のまま帰ってくる。

町の出身の川田(草薙剛)は、この不思議な現象を調査するため厚生労働省から派遣されるが、そこで、死んだ親友俊介の恋人だった葵(竹内結子)と再会。しかし、葵は俊介の死から立ち直れないでいた。

町では亡くなった人々が次々によみがえる。妻を残して死んだラーメン店の店主、娘を出産し亡くなったろうあ母、いじめを苦に自殺した中学生。

大切な人が戻ってきたことで人々の心は揺れる。だが、よみがえりの期間は限られていた。葵は恋

「黄泉がえり」

人俊介のよみがえりを願うが、かなわない。葵を思う川田は複雑な気持ちを抱く一。

死者との再会を描いた作品には優れたものが多い。ケビン・コスナーの「フィールド・オブ・ドリームス」や山田太一原作の「異人たちとの夏」など。

死者と再会した生者たちが、自分の心の中を見つめ、真実と穏やかさを獲得していく。そんなテーマを「月光の囁き」「害虫」などで注目の塩田明彦監督は、群像劇のように描く。

懐かしさあるオレンジ色がかかった画面、純朴な人間と美しい自然、ファンタスティックな光の映像が、一つ一つのエピソードを紡いで切ない。ちょっと「シックス・センス」っぽいひねりも効果的だ。

ただエピソードが多い分、中心となる主人公二人の物語は薄れてしまいがち。主役の人物設定と演技に、もっと深みがほしかった。センスは良いだけに惜しい。

記者の採点 = ★★★☆☆

(富)

2003年1月15日

社会の潜在意識えぐる

ドキュメンタリーの枠に収めるには、あまりにけれん味たっぷり。かといって、米国民の潜在意識をえぐり出そうという緊張感あふれるテーマは、気を抜く暇を与えない。

米映画「ボウリング・フォー・コロンバイン」は、十三人が犠牲になった九九年のコロンバイン高校銃乱射事件を足掛かりに、不寛容と暴力がはびこる、米国白人社会の一つの本質に迫る。

マイケル・ムーア監督は、銃器への執着が根強い精神風土を出身地ミシガン州で取材したかと思うと、コロンバイン高校のあるコロラド州で軍事産業や基地が事件に与えた影響に思いをはせる。

米国社会の特異性を実証するためカナダに飛び、ロサンゼルスでは視聴率目当ての犯罪報道で黒人やヒスパニック系への恐怖心をおおるメディアの構造に切り込む。

果てには銃規制反対派の象徴、チャールトン・ヘストン全米ライフル協会会長に突撃インタ

「ボウリング・フォー・コロンバイン」

ビュー。肉体派で知られた往年の人気俳優が追い詰められる様子は見ものだ。

客観事実にとらわれず、画面に姿をさらしながら対象に近寄り自ら行動を起こす。肉薄というより、とぼけた風ぼうで安心させ相手の本音がこぼれてくる瞬間を待つかのようで、ユーモアさえにじみ出る。

さらにはニュース映像から劇映画、果てはアニメーションまで取り込み、名曲「この素晴らしき世界」を皮肉たっぷりに挿入するなど、自在に構成してゆくのだ。

銃を乱射した高校生二人が、直前までボウリングに興じていたのがタイトルの由来だが、少々強引に結び付けた印象も。

米中核同時テロ以後の米ブッシュ政権の対応に、批判ムードが満ちていた昨年のカンヌ国際映画祭に出品。観衆の喝さいを浴び、記念賞ももらった話題作。

記者の採点 = ★★★☆☆

(伊)